

女性・ジェンダー・歴史

イギリス女性史研究会

第2号

発行日 2009年2月15日

シンポジウム

「奴隷貿易廃止と女性たち」開催

2008年9月28日（日）成蹊大学においてイギリス女性史研究会と成蹊大学文学部の共催で、シンポジウム「奴隷貿易廃止と女性たち—200年目の記憶を継ぐために」が開催され、60名の方にご参加いただいた。竹内敬子（成蹊大学）が司会を務め、以下のようなプログラムで進められた。

〔報告〕

大石和欣（放送大学）

「共感の疼き—奴隷貿易廃止運動と女性の自己表象」

富永智津子（宮城学院女子大学）

「アフリカから見た奴隷貿易・奴隷制とジェンダー」

〔コメント〕

奥田伸子（名古屋市立大学）

「20世紀後半のイギリス社会における“Race” Issue と Feminism」

井野瀬久美恵（甲南大学）

「奴隷貿易廃止200年—都市戦略としての記憶の形」



目次:

特集 シンポジウム 「奴隷貿易廃止と女性たち」開催	1
趣旨説明(竹内)	1
大石報告	2
富永報告	3
奥田コメント	
井野瀬コメント	4
論点整理	5
討論	6
参加記(見市)	7
自著紹介 堀内真由美『大英帝国の女教師』	8
会務報告	9
活動紹介 イギリス・ジェンダー史 読書会	10
共催企画 グランド・セミナー (3月8日、16日)	11
総会・研究会予告	12

当日は、東北新幹線の故障をはじめ交通機関の乱れがあり、当初の予定通りに進行することはできなかったが、参加者のご協力により、こうしたトラブルも乗り越えて、実りある議論を行うことができた。

以下、当日の報告・コメント・論点整理・討論の要旨と参加記を掲載する。また、このシンポ成果の公刊についても、現在検討中である。

シンポジウム開催の経緯と趣旨

竹内敬子

このシンポジウムの企画は、会員間の「雑談」の中から生まれた。会員の多くは資料収集や研究交流のため、頻繁に渡英する。2007年に渡英した会員たちは口々に、イギリス各地での「奴隷貿易廃止200年」の催しに強い印象を持ったことを語った。井野瀬報告で触れられたように、それは大々的なものから地方の小さな博物館の一角の小さな展示まで及んでおり、イギリス人たちが、この「節目」の年をいかに重視しているかということが体感された。

他方、イギリス女性史研究会も10年という「節目」を迎え、今後活動領域を広げて行くことが検討されていた。そこで「奴隷貿易・奴隷制度の歴史を軸にイギリスとアフリカ、過去と現在のあいだを繋いだ時に何が見えてくるのか？」という問題にとくに女性の視点から迫る」という趣旨でシンポジウムを持つことになった。幸い、私の勤務先の成蹊大学文学部学会との共催という形を取ることが出来、会場や実務支援などの便宜を得ることが出来た。

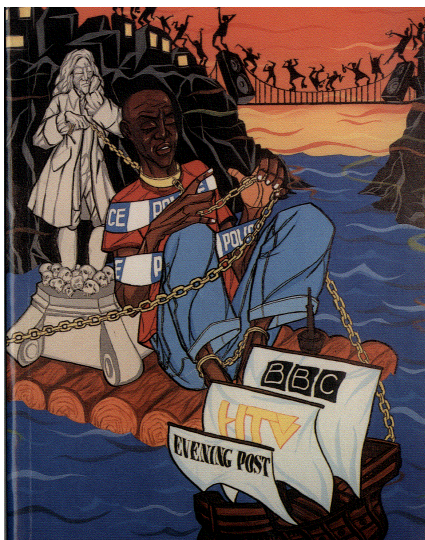


奴隷貿易廃止・奴隷制廃止運動で女性が大きな役割を果たしたことはよく知られている。あるいはその逆に女性解放運動あるいはフェミニズムの発展にとっての奴隷貿易廃止・奴隷制廃止運動の意味はしばしば語られる。むしろ後者が強調されてきたくらいがある。これを、新しい眼で見直す必要があるのではないか、というのが大石報告の試みである。

さらに、奴隷送り出し先のアフリカ側からこの問題を見たらどうなるのか？ゲスト・スピーカーの富永智津子さんを招くことが出来たのは私達にとって大きな意義があった。イギリス史研究者にとっての「盲点」になりがちな重要な論点を富永報告は提示し、この問題を立体的に捉えることが可能になった。

200年前という歳月は長い、奴隷貿易廃止・奴隷制廃止の問題は「遠い過去」の問題ではない。きわめて「現代的」な問題であるからこそ、記念のイベントがさまざまな「意図」を持ってイギリス各地で行われたのだ。井野瀬報告はこの点を明らかにした。奴隷貿易という形でグローバルな規模で人口の移動があったことは、現在の地球規模での経済状況・政治状況を決定する上でとても重要である。また、各地でのエスニシティをめぐる問題もこれに端を発するものが大きい。奥田報告ではこの現代的な意味が語られた。

大変に刺激的で有意義なシンポジウムであった。ここでの報告や議論をもとに、今後さらなる議論、研究の深化を図ることが出来れば、と思っている。



【報告】

共感の疼き

一奴隷貿易廃止運動と女性の自己表象

大石和欣

消費文化を謳歌した「白い」はずの18世紀イギリス社会は、実は「どす黒い」奴隷貿易によって支えられていた。それを廃止させた一連の運動はキリスト教的人道主義だけでは説明できない。背後には、錯綜するイデオロギーがある。

一つには、アメリカ独立戦争に敗れたイギリスにとって、奴隷貿易廃止運動は道徳的腐敗からの自己浄化と自己正当化を演出する政治劇であり、さらには道徳的価値を付与された資本を世界システムの中で流通させる経済的戦略でもあった。

しかし、看過してはならないのは、女性たちにとって、奴隷貿易廃止運動は間接的ながらも国政に関与することができた政治運動でもあったことである。1787年11月6日付けの『マンチェスター・マーキュリー』は、奴隷貿易廃止のための署名運動によって、女性たちが政治に対して「公的な形での干渉」を行うことを求めている。宗旨を違えながらも、中流階級女性たちはプランテーション産の砂糖不買運動などを通して、いわゆる公共圏へ積極的に参与していった。

また、奴隷貿易廃止運動は女性による文学運動でもあった。福音主義者ハナ・モアからユニタリアン教徒アナ・バーボルド、クエーカー教徒メアリ・バーケット、元皇太子愛妾であり作家でもあったメアリ・ロビンソンにいたるまで、多様な女性たちによって巨大な反奴隷貿易詩群が構築された。そこには、疎外され、抑圧された存在としての奴隷女性たちへの「共感の疼き」が吐露されている。

奴隷貿易廃止から200年が経った現在、過去の傷跡（トラウマ）への遡及と同時に、廃止運動に貢献した女性たちの言説についても再考する意義はある。



【報告】

奴隷貿易の世界史的意義を問う
—西洋史とアフリカ史の接点を求めて

富永智津子

奴隷貿易を通して経済的にアフリカを搾取し続けた西欧社会は、その内部で人道主義的・博愛主義的奴隷貿易廃止運動を生み出すことによって、人権や差別の概念を鍛え上げ、世界史のアリーナにおける自己のイメージを確立していった。しかも、そのイメージを際立たせるためには、あくまでも黒人の劣等性を強調する必要があった。その結果、アフリカの植民地化は、アフリカを文明化する手段として容認され続けることになる。奴隷貿易に反対した人道主義者たちが、植民地化を「侵略」としてとらえる視点を持ちえなかった背景である。一方、アフリカ社会は、外部からの奴隷貿易廃止とそれに続く植民地化の中で、主体的に奴隷貿易や奴隷制を廃止するチャンスを失い、独立後も続く旧宗主国の新植民地主義支配の下で、この旧宗主国と結託した支配層は、「部族主義」や「階層差別」という形で、旧宗主国のメンタリティーを共有してしまった。今なお残る奴隷制や人身売買といったアフリカ社会の人権問題は、こうした歴史過程の中で置き去りにされてきた領域なのである。その中で、女性はさらに劣位にとどめられ、男性優位の家父長社会の中で生きることを余儀なくされている。

ここでは、奴隷貿易廃止を考察対象に取り上げたが、西洋史とアフリカ史の接点は、すべての世界史的事象を西洋史とアフリカ史の両側面から考察し読み解くことによって可能となるのであり、それが、世界史を描くために必要なプロセスでもあると考えている。



【コメント】

20世紀後半のイギリス社会における
“Race” Issue と Feminism

奥田 伸子

1982年、Hazel Carbyは“White Women Listen! Black Feminism and Boundaries of Sisterhood”という刺激的な論文を書き、1980年代初頭の女性史、女性研究における‘racism’を批判した。戦後、西インド、そしてインド亜大陸、アフリカなどから移民が数多くイギリスに到着するようになり、1970年代初頭にはイギリスのいくつかの都市においてカラード女性労働者が積極的な役割を果たした労働争議も多く起こった。にもかかわらず、イギリスにおいて女性史研究、女性研究からの反応は鈍く、上記の批判となったのである。それからさらに25年以上経過した現在、確かにマイノリティの研究は盛んになった。しかし、イギリス女性史において、彼女たちの歴史、経験を統合した女性史研究が十分に行われているであろうか。「移民といえば男性、女性といえば白人indigenous女性」なのではないだろうか。私たち日本にいる研究者もこの視角を共有しているのではないだろうか。

白人indigenous女性中心の視角から脱却し、マイノリティ女性を視野に取り込んだ女性史研究を行うためには、教育・労働・福祉国家などのエスニック・マイノリティ女性の経験からの見直しとともに、奴隷制やRacismなどへの白人indigenous女性の対応や関与、マイノリティ女性の問題にたいするWhite feminismの無関心・忘却などの歴史の研究など、イギリス女性研究上のアジェンダの大胆な再考が必要である。とはいえ、女性の歴史の多様性はblack/whiteの単純な2分法では分析できない。ethnicity, gender, class相互の複雑な関係を視野にいった分析視角が必要である。



写真は、1930年代から50年代において、イギリスにおけるカラード男女の運動、女性運動、および国際的な女性運動で活躍したジャマイカ出身のUna Marson (1905-1965)。

出典：Jarrett-Macauley, Delia (1998), *The Life of Una Marson 1905-1965*, Manchester University Press, p.60.

【コメント】

奴隷貿易廃止200年

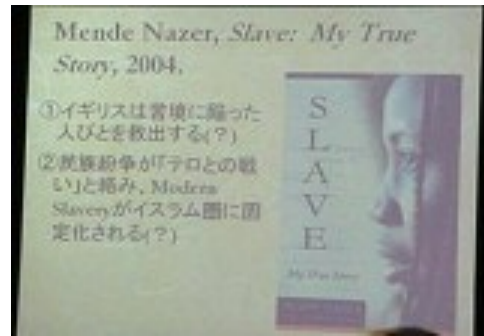
—都市戦略としての記憶の形

井野瀬久美恵

奴隷貿易廃止法案がイギリス議会を通過してちょうど200年目となった2007年、この歴史的事件を顕彰するイベントがイギリス各地でおこなわれた。いずれの展示についても印象深かったことは、各都市がこぞって、この事件と自分たちの町がどのように関わってきたかの記憶を掘り起こし、それを多様に視覚に訴える形で再記憶化しようとした点である。それゆえに、奴隷貿易で巨富を築いたといわれる3大港町（リヴァプール、ロンドン、ブリストル）のみならず、それこそイギリスじゅうの都市で、「奴隷貿易の記憶」を奪い合い、競い合い、その廃止運動のなかに自分たちの居場所を求める動きが認められた。その結果、2007年を通じて（あるいは2008年になっても）、イギリス全体がこの記憶で盛り上がったのだが、あえて区分すれば、顕彰のピークは以下の3つに分けられる。

第一のピークは、200年前に法案が通過した3月25日前後。奴隷を模して手枷、足枷（時に首枷）を付けた市民が議会のあるロンドンをめざして行進したのも、ブレア首相（当時）が奴隷貿易のなかで果たしたイギリスの役割について、「謝罪」という言葉を避けて「深い悲しみと遺憾の意」を表明するとして物議を醸したのも、この時期のことである。1807年の廃止法案提出の「主役」だった国会議員ウィリアム・ウィルバーフォースの地元ハルでは、彼を顕彰する記念館（Wilberforce House、1906年開館）を大幅に改修し、「人道に反する犯罪」である奴隷貿易に対して、「人権都市ハル」を強調する展示をリニューアルオープンさせた。

二つ目のピークは、リヴァプールに奴隷制度をテーマとする世界初の博物館、「国際奴隷博物館」がオープンした8月23日前後。この日は、1791年、当時フランス領だったサン・ドマング島で、やがて黒人初の共和国ハイチの独立につながる奴隷大反乱が起こった日であり、ユネスコにより「国際奴隷記念日」とされている。リヴァプールは、この「負の記憶」を都市の再開発に織り込んだ実践によって、2004年、ユネスコから世界遺産に指定された。2007年のこの日、かつてアフリカ最大の奴隷供給地のひとつであったイボ（現ナイジェリア東南部を拠点とする民族）の首長を招いて盛大な開会式がおこなわれた。博物館は、奴隷となったアフリカ人の主体性を全面に謳いあげる「アフリカの物語（An African Story）」を掲げた。その展示のありかたは、上記ハルの展示とも、また、同時期にイギリス議会の一部、廃止法案の決議がおこなわれたウェストミンスター・パレスを会場とする「イギリス議会の物語」とも、まったく異なっていた。



最後のピークは、歴史のなかで黒人の活躍や貢献を発掘し、再記憶化する国際プロジェクト、Black History Monthである10月（アメリカやカナダの場合は2月）前後。この時期、ロンドンのドックランド博物館では「ロンドン、砂糖、奴隷制度」をテーマとする特別展がはじまり、バーミンガムで自らの半生を記録し、各地での演説を通じて奴隷貿易廃止運動を主導した元奴隷、「オラウダ・エキアノ」展が人気を集めた。

報告では、奴隷貿易200周年を記念するイベントがもっとも盛り上がりを見せた北部イングランド諸都市を中心に、「奴隷貿易とその廃止運動の記憶」を競い合う各都市の展示の様子をパワーポイントで紹介しながら、21世紀におけるこの歴史的記憶の意味、あるいは盛り上がりのなかで「捏造される記憶」を歴史学はどう見るかなどについて考えた。と同時に、「廃止200年目の記憶」の特別展が、いずれも「まだ奴隷制度は終わっていない」というメッセージを伝える「現代の奴隷制度(Modern Slavery)」で終わっていたことに触れながら、「200年目の物語」のありようを見直した。



国際奴隷博物館・開館式で演説するイボの首長
(撮影・井野瀬)

【論点整理】

井野瀬久美恵

2本のメイン報告、それを補完する2本のサブ報告の後、フロアの参加者を含めて活発な意見交換がおこなわれた。討論に入る前に、報告者、参加者全員で共有しておきたい論点を以下の5つほどにまとめ、提示した。

1. 奴隷貿易廃止運動とその後のフェミニズム運動の展開との関わり。

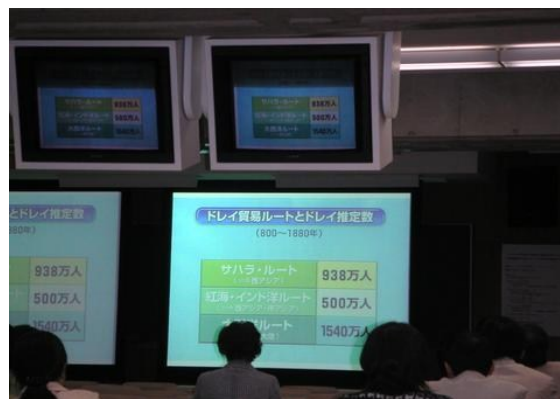
「奴隷貿易廃止協会」設立100年目を受けて書かれた「女性の解放」(‘The Emancipation of Women’, *Westminster Review*, Vol. 128, No.2, 1887)には、「奴隷貿易廃止運動への関与から女性の解放、権利拡大を求める運動がはじまった」と明記されている。この視点を入れて女性史を語り直すとどうなるか。直接的にせよ間接的にせよ、奴隷貿易廃止運動とフェミニズム運動との関連をどう捉えるか。

2. 非白人のアイデンティティを組み込んでイギリス史、ないしイギリス女性史を書き直すということ。

奴隷貿易廃止運動のなかで有形・無形の活躍をした非白人たちの発掘が進められている。彼らの存在とも関わりながら、第二次世界大戦後の帝国収縮期にイギリスに移民した非白人のアイデンティティ、とりわけ奥田報告が指摘した移民女性の存在を組み込んでイギリス史、そしてイギリス女性史を書き直すとするか。

3. 大西洋横断奴隷貿易ルートと他の奴隷貿易ルートとの関連。

今回の200周年記念を契機に再記憶化された対象は、もっぱら大西洋を渡る奴隷貿易ルートであり、同時期に存在したサハラ砂漠や紅海、アフリカ大陸北部を通過する3つほどのルートはまったく看過された。しかしながら、これらのルートでは、1807年以降も奴隷貿易が継続しておこなわれており、しかもイギリス政府はその事実を知りつつ、黙認していたと思われる。こうした他の貿易ルートを含めて奴隷貿易を捉え直し、奴隷貿易/奴隷制度自体のイメージを膨らませる必要がある。とりわけ、「現代の奴隷制度」の多くが今回顕彰された大西洋横断ルート以外で問題視されていることを考えると、イギリスや欧米諸国が考える「奴隷貿易廃止」とは何だったかについて、今一度見直す必要がある。



4. ヨーロッパ史とアフリカ史の共通経験として大西洋横断奴隷貿易 (Trans-Atlantic slave trade) の歴史を見直す。

たとえば、この「共通経験」は「オリジナルなアフリカ史」、あるいは「オリジナルなヨーロッパ史」とどう関連するのだろうか。ここにジェンダーの視角を入れると、この共通経験のなかに、ヨーロッパ、アフリカ双方の支配的立場にあった成人男性たちによる共犯関係が浮かびあがってくることは、富永報告が指摘した通りである。

5. 200年目の顕彰と歴史の改竄——歴史学は何をすべきか？

200年目を迎えた「奴隷貿易廃止」という歴史の出来事を、イギリス各地、とりわけ北部イングランドは熱狂的に歓迎した。そのなかで、これまで忘れられてきた史料が「発掘」され、「再発見」されるとともに、それは観光の対象ともなった。そもそも、イギリス人は廃止200周年に対してなぜこれほどまでに盛り上がったのか。この歴史的事件に関して、誰のどういう記憶を今の時代によみがえらせようとしたのか。顕彰のなかで捏造される「記憶」や「史料」に対して、歴史学は何をすべきだろうか。



【質疑応答】

以上の報告・コメントを踏まえて、討論がなされた。時間不足で、十分な議論はできなかったが、主に以下のような論点をめぐって、討論がなされた。

討論記録については、土方史織さんに大変お世話になった。記して謝意を表したい。

Q 1 : 本シンポジウムが奴隷制と女性をテーマして、地理的にもイギリスとアフリカを取り上げているのに、なぜ＜アメリカ＞を取り上げないのか？アフリカからアメリカにきた黒人女性のことはなぜ取り上げないのか？



A 1 : 決してアメリカを無視したわけではないが、人的要因、その他のさまざまな制約のなかで、ここでは報告を準備できなかった。

Q 2 : 大石報告では、18世紀後半に奴隷制反対運動が盛り上がり「廃止」になったにもかかわらず奴隷制的な状態は続くとする。では奴隷貿易反対運動の成果はどう評価すべきなのか。運動が始まったことの意味や奴隷制が続いていることの意味にはどう考えたらよいのか？

A 2 : アメリカ植民地喪失時、イギリスはこれをモラルの問題としたのではないか。喪失のショックはセンチメントの変化に還元され、アメリカと自分たちを差別化していく手法として、喪失の補完として奴隷制反対運動が展開されたとみるべきだ。



Q 3 : 富永報告ではアフリカの奴隷制はヨーロッパという奴隷制とは違うといわれる。しかし、アフリカでは独裁者が国民を支配している現実がある。下手をすると、アフリカの奴隷制よりもイギリスの奴隷制はマシだったという解釈としてとらかねないことになる。このような危惧も踏まえると、「人権」というものをどう考えたらよいのだろうか？

A 3 : (アフリカと我々では) 人の命の扱い方に差があり、それは良くないことである。アフリカの現状はやはり悲惨であり、子どもの売買は常態化している。まさにModern slaveryの状態。でもヨーロッパ側からの押し付けは良くない。アフリカの中から芽生えるのを待つしかない。



参加記——シンポジウムのおみやげ

見市雅俊(中央大学)

シンポジウムには、協賛団体の「歴史と人間」研究会のひとりとして参加した。

最近はこの種の催し物に参加することが少なくなった。とくに「近頃の若い者」の、いかにも学者然として脇をしっかり固めた、ならば最初から活字にすればよいのにとおもうような報告が多くなったこともその一因である。

このようなせっかくの機会は、活字の世界とは違う、粗削りでもよい、なにかしらの問題提起の場であるべきだとおもう。休みを返上して出向いてくれた「お客さん」に、なんでもいい、「おみやげ」をもち帰っていただく心がけが必要なのだ。では、このシンポジウムはなにをおみやげとして残してくれたのか。

最初の大石報告は、前振りが長すぎて、しかも律儀に持ち時間を厳守したため、英文学の立場から「共感の疼き」と女性の奴隷制度反対運動参加との交錯点を明らかにしようとする肝心の本論がほとんど展開されずじまいにおわった。完全な時間配分のミス。

奥田氏の報告はまさに問題提起的であり、挑発的だった。すなわち、イギリス国内の「マイノリティー女性」の観点から、これまでのイギリス女性史が白人女性を、さらに加えてイギリス国内のカラード・ピープルの歴史が男性をそれぞれ主たる対象としてきた、その二重のネグレクトに対する異議申し立ての内容である。あえて苦言を呈すれば、もち時間をおおはばに超過し、その結果、全体として「てんこ盛り」すぎて「食傷」気味になってしまった。「興行主」の指定した時間をきちんと守り、内容をもっと絞り込んだほうがさらに説得的になっていたはずである。

そのうえで、この種の報告をラインアップしたことに、主催者側の度量の広さをみた。もしかすると自らの命取りにもなりかねない「時限爆弾」をあえて抱えこみ、そうして、日本西洋史学のなかでは破格の大所帯であるイギリス史学界（と英文学界）だったからこそ、これまで存在しえたのかもしれない「イギリス」・女性史という研究領域の存在意義そのものを問うてみよう。21世紀の新しい女性史研究のあり方を模索する企画者はそう考えたのではないかと想像する。もしそうであれば、おおいに共鳴できる心意気である。

井野瀬氏の報告は、イギリス各地で開催された奴隷貿易廃止200周年記念イベントの様相を紹介する「フィールド調査」の報告であり、いつもの井野瀬「節」の名調子にのって、パワーポイントを効果的に駆使しつつ、今日のイギリスの人びとが奴隷

制度という、目をそむけたくなる過去にどう立ち向かおうとしているのかを伝えるもの。

最後に、アフリカ史研究の富永氏の報告は、大西洋奴隷貿易に先行し、さらにその廃止後も続いた東アフリカ奴隷貿易の特徴を概括したうえで、近代の西洋における奴隷制度の廃止がもつ世界史的な意味を明らかにしようとする、壮大な、しかし同時に長年の地道な研究の成果をふまえた問題提起であって、このシンポジウムの白眉だったようにおもう。

富永氏が紹介したところによると、今日のザンジバルでは、かつての奴隷貿易にまつわる建物や、さらに歌や踊りなどが観光の目玉になっているという。それを見物するのは、もちろん、「白人」である。それに対する、井野瀬氏が紹介したイギリスでの懺悔行事。奴隷制度という「遺産」をめぐるこの印象的なコントラストに、この問題が「謝罪」で水に流せるような「過去」ではないことを如実に感じた。その富永報告の論理を突きつめてゆけば、イギリスでの贖罪のイベントも、所詮は、自ら蒔いた種を自らこれみよがしに収穫する先進国の「いい気」なそれでしかなくなり、それどころか、抑圧ゆえに奴隷制度を自らの手で清算できなかったアフリカの後進性をさらに際立たせてしまうことにもなりかねないだろう。

他人事ではない。のん気にイギリス史を生業としてきた私のような者にとっても、ずしんと響いてくる問題提起であって、書いている今もどうそれを受けとめてよいものかわからない。それこそ、極上の「おみやげ」なのだ。

シンポジウムの後のイギリス・パブ式支払いの懇親会、さらに吉祥寺駅近くの昭和そのものの居酒屋での二次会。抱えきれないほどのおみやげ。参加してよかったと素直におもえるシンポジウムだった。

付記：以上の参加記の執筆に際しては、土方史織氏とのディスカッションがおおいに参考になった。



◆自著紹介

『大英帝国の女教師—イギリス女子教育と植民地』

(白澤社発行・現代書館発売、2008年)

堀内真由美

十九で「女性学」に出会ってしまったのがことの始まりである。自分と向き合う苦しさ、家族や親しい人々をとくに「敵に回す」しんどさ、それに自分の経験が整理されていく「学問的」喜びが少々。

次なる試練は、公立中学校の現場体験である。なまじ女性学的視点を身につけてしまったばかりに、教室で、体育館で、グラウンドで、「女の子」たちの様子が見えすぎるぐらい見えた。職員室では遠慮なくものを言う修士卒の「若くはない女教師」だったが、目立てば叩かれ黙していれば無視される女子生徒の置かれた状況には、まるで女性学のテキストを見る思いがした。

見たものを言語化したいと向かった1990年代初めのイギリスは、80年代から続く「教育とジェンダー」論が盛んだった。むさぼるように学びつつ、彼の地でのアカデミズムの理論展開と学校現場とのつながりをうらやましく思った。そのうち、「イギリス」を知りもせず情熱まかせでやって来た自分の非力さに気づく。「女性と教育」を通してイギリス近現代を知ろうと思ひ至った。

現在。歴史を学ぶのが楽しくてしかたない。もちろん進んでいく先々に壁にぶつかり難儀をしているが、少しずつわかってきたこともある。「女性学」発「教育現場」経由で、遅まきながら歴史を学び始めた者が、今の時点でわかったことを書かせてもらった。前置きが長くなったが、この場を借りて、少し本書の紹介をさせていただく。

女子別学校あるいは男女共学校と聞いて、どんなイメージが浮かぶだろうか。前者には「閉鎖的」「保守的」、後者には「開放的」「進歩的」という印象が、私にもそれまで強かった。しかし、このイメージは実態を映していないことをイギリスの議論から学んだ。1980年代に行なわれた「共学のなかの女子別設定」という実験をとおしてである。女子生徒が「女らしさの規範」に従い脇役に徹する傾向と、教師がそれを利用して教室運営する—男子により注意を払い、より励まし、女子を無視するか「甘やかす」という教室観察の結果に、「やはり」と納得させられる一方、女子別クラスを設けて行なった「実験授業」で、彼女らが発揮する積極性やリーダー性にも驚かされた。

女子だけなら、もはや「女らしさ」を試されることを恐れる必要はない。考えれば単純なことだ。ではなぜ、女子生徒の自主性を伸ばす女子校という「女子別設定」は、肯定的な印象で語られてこなかったのか。イギリスで「共学のなかの女子差別」への解決法を議

論する際、70年代まで顧みられなかった女子別学中等教育が、とくにフェミニストたちから称揚され始める。彼女ら自身が「古くさい」「反フェミニズム的」と批判してきた女子校が、である。いったい女子校は、イギリスでどのように生まれ、発展し、評価されてきたのか。

19世紀フェミニズムの発展とその「衰退」とに、答えの鍵があることは推測できた。本書の第1部と第2部でこの推論の実証を試みている。教育内容や進学実績にみる女子中等学校の「男子校化」と、女教師の社会的地位の上昇が、第一次世界大戦直後の不況を背景に、「フェミニズム嫌い」の世論を刺激した。それが、一部の革新的知識人たちが支持した「性科学」によって喚起された異性愛至上主義と結びつき、女だけで女のために「男並み」の教育をする「人と場」を攻撃したというのが、あらましである。



第3部では女教師たちによる「海外進出」を描いた。すでに女子中等教育の発展期から、女校長たちは白人定住地域への「イギリス女子教育」拡大へと動いていた。しかし史料を読むうちに、彼女たちがあらたにアフリカの、しかも現地人女性を対象にした女子中等教育にのりだした事実に出くわす。調べていくと、国内での「女子校たき」が激しさを増す時期に、女教師たちのアフリカ進出計画が進められたことがわかった。

史料読みは楽しい時間ばかりではなかった。「イギリス帝国女教師」の姿に、かつての「大日本帝国女教師」の姿が重なって見えたからである。以前聴講した、ある在日コリアン、女性研究者の授業。そこで語られたのは、「女権拡大」に

関心を寄せていた日本人女性教育家たちが、「帝国臣民の母」養成のために朝鮮人女性への教育活動を行ったことだった。

イギリスの女子教育を劇的に変えた女教師たちのフェミニズムと、彼女たちが固執した「帝国の女教師」としてのプライドを、圧倒的な男性中心社会のなかでのことだと擁護する「甘さ」と、白人エリート女性の優越性を見過ごさない「辛さ」とを、適量ずつ加えて描けたらと思った。後味がぼやけたら、それは、自称フェミニストでかつての「帝国」の女でもある私の自己分析が、まだ十分でないということだ。もちろん勉強不足という根本原因をごまかすつもりはない。それでも、本書を手にとっていただけるなら、これに勝る喜びはない。

◆会務報告 事務局会議開催(2008年12月21日)

12月21日(日)青山学院女子短期大学において事務局会議が開催され、次のようなことが確認された。

■シンポジウム「奴隷貿易廃止200周年と女性たち」の成果公刊について

2008年9月28日に成蹊大学文学部と共催で開いたシンポジウムについて、論点整理が行われた。今後、井野瀬代表の責任で、当日の報告者、コメンテータはもちろんのこと、それ以外の方々の寄稿をもふくめながら、1冊の書物として刊行する準備を進めることが決定された。ただし、イギリス女性史研究会編という形ではなく、個人の責任編集とする。

■年次総会について

年次総会は原則として、毎年12月下旬に開くこととする。2009年度の日程については、2009年12月20日(日)を第一候補として、調整を進めることが決定された。

研究会、総会で構成されるが、今年度のテーマは「女性と親密圏ー福祉の視点からー」とし、高田実が企画に責任を負うこととなった。

■研究会について

2009年6月13日(土)午後、西洋史学会(専修大学)の機会を捉えて、社会政策学会ジェンダー部会と共催の形をとりながら、竹内敬子氏にPh. D.の成果を報告してもらい研究会を開催するという方向性が確認された。今後、共催の可能性を含めて、詳細について詰めることになった。

■ニューズレターの発行について

ニューズレターは、毎年1月と7月に発行し、シナプスに発送を依頼することが決まった。

第2号は、2009年1月24日発行の予定とする。これには、奴隷貿易廃止シンポのまとめ、堀内真由美氏の自著紹介、K.Gleadle氏来日企画の紹介、*Civilising Subjects* 読書会記録、その他を掲載する予定である。投稿内容次第では、12頁建てに変更する。

第3号については、2009年7月発行とし、『女性と高等教育』の各地での検討結果を踏まえた、論点整理を中心とした構成とする。

■ホームページについて

掲載の認可については、常任事務局と代表が最終責任を負うこと、つまり両者の認可を経ない掲載は認めないことが確認された。

■事務局体制の整備について

次の4点が確認された。

1. 事務局会議は、基本的に年次総会の前に開催し、年間計画、次期研究会企画、予算・決算の承認などを議論する。
2. 会の基本的な運営は常任事務局がおこない、会務の執行に責任を負う。
3. 常任事務局に対する意見・要望などは自由におこなえる。
4. 次期研究会の企画原案は、常任事務局が最終的な責任を負う形で提案する。

◆活動紹介—イギリスジェンダー史読書会

Catherine Hall, *Civilising Subjects*を読む

竹内敬子

2003年10月より、東京で「イギリスジェンダー史読書会」という小さな読書会をやっています。当初、5名から出発しましたが、現在は大学院生・社会人含め10名。これまでに読んだ本は、Natasha Walter, *The New Feminism* (Virago, 1999, first published in 1998), June Purvis ed., *Women's History: Britain 1850-1945: An Introduction* (Routledge, 2000, first published in 1995), Catherine Hall, *Civilising Subjects: Metropole and Colony in the English Imagination* (Polity, 2002)で、現在は、Hannah Barker ed., *Women's History: Britain 1700-1850: An Introduction* (Routledge, 2005)を読んでいます。

ほぼ月に1回のペースです。最近は、それに加えて各自の研究報告とそれに対する意見交換もしています。「楽しく無理なく」が合言葉で、テキストの1回に進む量は「前日のみの予習で間に合う範囲」で、ゆっくりとやっていますが、それでも着実に回を重ねていく中で互いに得たものは決して小さくないと思っています。

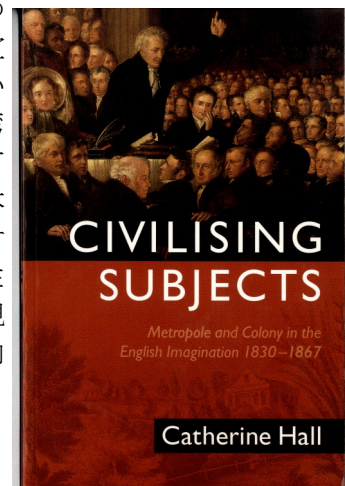
本稿では、先日読み終えたCatherine Hall, *Civilising Subjects: Metropole and Colony in the English Imagination*を紹介したいと思います。Hallがこの著作を著すにあたっては、彼女の自分史が深く関わっています。Jamaica出身のStuartと結婚したHallは、Birminghamで学生生活を送ります。保守的なBirminghamの街で、黒人の夫と白人の妻のカップルは、冷たい視線をあびることもありました。1960年代末から70年代には、著者は、子育てしつつ、学生運動、フェミニズム運動、フェミニスト・ヒストリーと精力的に社会や学問の現状の変革に取り組みます。

Leonore Davidoffとの共著、*Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class 1780-1850*を書き終えて、次の研究課題を模索中の著者は、1988年に一家でジャマイカを訪れます。当時、ポストコロニアリズムの議論が盛んになりつつあり、フェミニストの連帯の中での「我々」の意味が厳しく問われており、著者は、自らのEnglishnessやwhitenessについて真剣に考えるようになっていました。また、whitenessの持つ権力性が、女性の場合と男性の場合では異なっていることについても……。ジャマイカを訪ねるたびに「白人女性」である自分に向けられる敵意を直接的に体験していたことは、著者の問題意識を一層鋭くしました。

この滞在中に、ジャマイカの北海岸をドライブしていた一家はKitteringという小さな村を通ります。著者はその名前に驚きます。著者が生まれた町はNorthamptonのKitteringという小さな町だったのです。なぜ、自分が生まれた町の名前が、ここにあるのか？ 自分の故郷とジャマイカのこの村の関係は何なのか？ しかも、その村には、“William Knibb, the Emancipator”と書かれたバプティストの教会がありました。彼女の父親はバプティストの牧師でした。William Knibbとは誰なのか？ 非国教徒が帝国の形成に一体どのような役割を果たしたのか？

著者の自分史と帝国の歴史の緊密な絡まりが徐々に明らかになって行きます。Birminghamでは、奴隷貿易・奴隷制廃止運動が盛んでしたが、これには、ジャマイカに派遣されたバプティストの宣教師たちと密接な関わりを持っていたのです。著者は、自らの生まれた町と同じ名前の町のあるジャマイカと、その地に多くのバプティスト宣教師を送ったBirminghamをフィールドに、これまでのジェンダーの視点にエスニシティの視点を加え、帝国の問題を帝国史的であると同時に地方史的に読み解いて行きます。

本著は二部構成になっており、Part 1の“Colony and Metropole”では、ジャマイカにおけるバプティストの宣教師たちの活動に焦点が当てられます。宣教師たちは、当初、プランターたちの敵意にあいながらも、奴隷制とキリスト教は相容れないと主張し、改宗した黒い臣民がジャマイカの将来を担う可能性を信じて、彼らの解放のために力を尽くします。しかし、奴隷制廃止後の解放後、黒人たちを西洋的価値観から断罪し、黒人の市民としての資質に疑念を持つ宣教師たちが増えていきます。モラント湾の暴動は、黒人の可変性を巡る論争を本国で引き起こしますが、ジャマイカ在住の宣教師たちは悲観的な意見を本国に向けて発します。



Part 2 “Metropolis, Colony and Empire”では、Birminghamに焦点が当てられ、この都市とジャマイカおよび帝国との関係が扱われます。1830年代のBirminghamでは、奴隷制廃止運動が盛り上がっていました。バプティスト信者たちは、他の非国教会派の人々とともに、キリスト教化された黒人たちと自分たちが「家族」でありうると考えていました。しかし、1850年代には、黒人との生物学的違いを強調するような言説が強くなりました。1860年半ば、そして、モラント湾暴動後には、白人男性の市民性は黒人男性のそれより優れたものだと考えられるようになりました。

著者は、タイトルの*Civilising Subjects* にふたつの意味を込めたと言います。すなわち、第一には非国教徒の男性たちが、市民としての力を得、自らを新しい臣民と位置づけ、自らに異教徒である帝国の臣民たちのキリスト教化の使命を課した、と

ということです。第二には、非国教徒の帝国の臣民の問題です。彼らは、本国の臣民とは異なる存在でした。彼らをどこまで文明化するのか、彼らが改宗した場合、どこまで市民権を与えるのか？ということは、本国の臣民にとって重要な案件でした。

本著では、ジェンダーやセクシュアリティの問題は、あまり前面には出てきませんが、もちろん、Hallのことですから、常にこれらの問題への目配りはされています。宣教師たちの家族の中での妻や娘の役割はいかなるものだったか、ジャマイカの黒人たちの家族や性的モラルのあり方を、宣教師たちが、キリスト教的道徳観や家族観からどのように断罪していくか、などの興味深い問題が扱われています。

本書は、帝国史を、国家の歴史としてのみでなく、地方史として書くことの可能性と必要性を示唆しています。極めて実証的な質の高い研究書でありながら、「読み物」としても非常にエキサイティングで面白いです。優れた歴史研究は「読み物」としても面白いことが重要なのだと改めて感じました。

■研究会案内

キャサリン・グリードル(Kathryn Gleadle) ・セミナー

これまで19世紀のイギリス女性史の領域で斬新な研究を提出し続けてきたオックスフォード大学のキャサリン・グリードル(Kathryn Gleadle)教授が来日します。今回はオックスフォード大学出版局に入稿したばかりの原稿を携えて、ジェンダーと公共圏の位相を見直す新たな概念と画期的な歴史解釈を提示します。

□東京

3月8日(日)14:00~17:00 於 放送大学文京学習センター(第1講義室)

文京区大塚3-29-1(筑波大学東京キャンパス内)

TEL 03-5395-8688 [地下鉄丸の内線茗荷谷駅下車徒歩2分]

‘Women, Gender and Collective Identities in the Nineteenth-Century Public Sphere’

コメンテータ: 高田 実(九州国際大学教授)、梅垣千尋(青山学院女子短期大学専任講師)

□名古屋

3月11日(水)15:00~18:00 於 名古屋マリオット・アソシア・ホテル(楠の間)

JR名古屋駅から直結

‘Friends of the People: Women and Community in Early Nineteenth-Century England’

コメンテータ: 奥田伸子(名古屋市立大学教授)

〔主要著作〕

The Early Feminists: radical unitarians and the emergence of the women's rights movement, c1831-51 (St. Martin's Press, 1995)

Women in British Politics, 1760-1860: the power of the petticoat (St. Martin's Press, 2000)

British Women in the Nineteenth Century (Palgrave, 2001)

主催: 科研基盤研究B「18世紀イギリスにおける女性の言説と公共圏」(代表 青山学院大学教授 富山太佳夫)
共催: イギリス女性史研究会、イギリス史研究会、「歴史と人間」研究会

【JWHN研究会】

■日時:2009年6月13日(土) 13時00分～16時30分

■場所:専修大学(会場は後日、JWHNホームページに掲載)

■報告:竹内敬子(成蹊大学)

「忘れられた姉妹たち:イギリス工場法とジェンダー1870～1900年」(仮)

■コメンテータ:吉田恵子(明治大学)、石井香江(四天王寺大学)

【年次大会研究会・総会】

■日時:2009年12月下旬を予定

■テーマ

「20世紀初頭の親密圏と女性一福祉の視点から」

*いずれの企画についても詳細は、JWHNホームページに掲載し、
会員にはメールでご連絡いたします。

【共催企画】 K.グリードル氏、来日

3月8日(東京)、11日(名古屋)、富山太佳夫科研費プロジェクト主催、イギリス史研究会、「歴史と人間」研究会と共催で、Kathryn Gleadleセミナーが開催されます。ご関心のある方はご参加ください。

*詳細は、11頁をご参照ください。

●河村貞枝・今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』
(青木書店、2006年)、好評発売中！

来年度のテキストにお使いいただければ幸いです。

●研究会のホームページができました(<http://jwhn.org/>)
掲載希望については、事務局までご連絡ください。

編集後記

ニューズレター第2号をお届けします。半年に1回発行予定です。会員相互の研究交流、女性史研究の最新局面の紹介、研究会・イベント案内、書評、旅行記など、会員のみなさまに伝たいことがあれば、遠慮なくご寄稿ください。会の発展のためのツールとしてご活用いただければ幸いです。(編集責任 高田 実)

イギリス女性史研究会事務局
〒150-8366
東京都渋谷区渋谷 4-4-25
青山学院女子短期大学
梅垣千尋研究室
E-mail: jwhn_adm@ybb.ne.jp
URL: <http://jwhn.org/>